

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02811

研究課題名(和文) ことば行為についての対話論的対照研究 対面的相互行為におけることばの日英比較

研究課題名(英文) A dialogical contrastive study on verbal act: a comparative study on utterances in face-to-face interaction

研究代表者

西口 光一 (Nishiguchi, Koichi)

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：50263330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：2言語で公開されている映画を基礎資料として、発話末の終助詞等の出現・不出現に注目して、バフチンの対話論的な観点から、日英の対話に臨む姿勢という現象を明らかにした。具体的に言うと、英語での発話では単に言い切ってしまう部分で日本語では終助詞等の形態がしばしば現れるのはどういうことかという問題を資料に基づいて考究した。研究成果の公表として、論文3編、国内学会発表1回、国際学会発表1回を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語研究及び第二言語言語教育ではこれまで文の構成法という観点で発話の構築法を考えてきたが、発話の構成という以前に対話に臨む姿勢が言語文化によって異なっており、その異なりが時に具体的な言語形式として現れることがある。英語を代表とする欧米語との対比における日本語の終助詞等の文末表現はその一つの典型である。本研究ではそのような現象に注目して対話に臨む姿勢というこれまでにない視点を提示した。対話に臨む姿勢という視点は研究的にも教育応用的にも重要な視点でありながらまだ十分に注目されていない。今後同視点の一層の深化が期待される。

研究成果の概要(英文)： This study investigated verbal acts in interaction in different languages from a dialogical perspective of Mikhail Bakhtin while giving particular attention to the appearance and non-appearance of sentence-ending particles(shujosi) and other similar items at the end of an utterance. And it successfully showed that different dialogical stances are working on the verbal behavior when people engage in language activities in different languages. The study particularly explored why people simply assert an utterance when they speak English while people add sentence-ending particles etc. when they speak Japanese. As products of the study, three articles were published, one paper was read at a domestic conference and another one was read at an international conference.

研究分野：日本語教育学

キーワード：対話原理 終助詞 発話 対照研究 対話に臨む姿勢

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

西口(2015)では、対面的相互行為についての対話論的な視座を提示した。同論考では、(1)対面的な相互行為は物理的な音声のやり取りに過ぎないこと、(2)そうした物理的な音声のやり取りが展開する出来事の系列として対話者相互に了解されるためには外言のやり取りだけでなく内言の交信を想定しなければならないことを、明らかにした。また、同論考では、パフチンの対話原理に基づいて、(3)人間を社会的交通の中で慣習化したプロトタイプ的なことば行為の構築法であることばのジャンルを充填された対話的主体と見、(4)そうした対話的主体が対面的な相互行為に従事するときに相互行為の各契機でそれぞれの主体において内言を要素とするポリフォニックな対話的空間が醸し出され、(5)対話者はそうした「内的発話の岸辺なき大海の中から浮上してきた一つの島」(パフチン, 1980)として外言を発する、という見解を提示した。そして、そのように生成される外言は、通常の場合は、(6)心的態度を直接反映する特定のイントネーションに載せられ、心的状態の直接的な表現である表情や視線や身体の動きとも同調されて発出され、(7)そのようなものとして「話し手と聞き手の共通の領域」(パフチン, 1980)となる、との見解を示した。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は、「同じ契機」における異なる言語によることば行為を比較対照することによって、そのような対話原理の諸見解を具体的な資料に基づいて検証し、検討することである。具体的には、「同じ言語活動従事の契機」であるのに言語によって異なる言語要素が現れる現象に注目することとし、「同じ契機」における異なる2つの言語での発話を分析し考察することとした。分析の対象は個々の言語要素の対比ではなく、一定の種類言語要素群の出現と不出現とする。

#### 3. 研究の方法

「『同じ契機』における異なる言語によることば行為」研究のために本研究で扱うのは、映画におけるセリフとその吹き替えである。具体的な人物がさまざまなセッティングで登場してかれらが相互に関わり合い相互行為に従事してドラマが展開される映画では無数のことば行為が交わされる。その具象体がセリフである。そして、そのセリフは特定の言語となることを免れることはできない。映画はそのようなものとして、その当該言語の使用者たちによって鑑賞される作品である。そして、一つの映画作品はしばしば、その中のセリフが別の言語のセリフにつまり吹き替えとして置き換えられてもう一つの作品となる。インフォーマルな観察から明らかのように、オリジナルのセリフと吹き替えは、類似の言葉遣いになっている場合もあれば、異なる種類の言葉遣いになっている場合もある。また、場合によっては要約のようにになっていることもある。しかし、特段の文化間的な背景理解の困難などがある場合などを除いて、いずれの吹き替えも基本的にはオリジナルのセリフの「最大限の等価物」としてプロの翻訳者によって起草されている。言語の生態として、このような状況はひじょうに特異なものである。しかし、それは、「同じ契機」における異なる言語によることば行為が観察できるまたとない機会でもある。本研究ではそうした契機における2種類の言語によることば行為を比較・対照する。具体的には、日・英の比較・対照を行う。

#### 4. 研究成果

今回、対面的相互行為におけることばを対話論的に対照(具体的には日本語と英語)して研究することを通して、改めて以下のことが明らかになった。(1)各言語には個々の発話の構成以

前に対話に臨む姿勢というようなものがあること、(2)そうした姿勢が実際の発話の構成に少なからず影響を与えること、(3)その影響の一つとして日本語発話における終助詞等の出現と英語におけるそうした要素の不出現あるいはその他の要素の出現という現象に現れること、である。(3)についての実証的な資料の概要を述べると、英語と日本語の2言語で公開されている、大部分が日常的な対面的相互行為で展開されている映画の英語のセリフと日本語のセリフを対照したところ、英語バージョンで平叙文となっている部分(809例)で、(a)日本語バージョンでは1つまたはそれ以上の終助詞が付加した発話が多数(37%)見られた、(b)「じゃない」「でしょ」「かも」「から」「のに」など終助詞以外が付加した発話も多数(9%)観察された、という特徴的な現象が観察された。これは日本語での言語活動では、叙述に対する態度や伝達態度などが留意されて、それを具体的に言語形式で示すことが要請されていることを示している。逆にいうと、日本語での言語活動従事において対話に従事する者は、叙述とそれへの判断だけでなく、発話の瞬間に現下の事柄に対する態度や伝達態度をもうごめかせてしばしばそれを言語的に表示するところが慣習化されているということになる。そして、英語などの欧米語においては多くは欠如している終助詞等是对話に臨む基本的な姿勢に関わるものなので、その習得を支援するためには言語面での指導ではない種類の指導が必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西口光一	4. 巻 22
2. 論文標題 人間学とことば学として知識社会学を読み解く 第二言語教育学のためのことば学の基礎として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 多文化社会と留学生交流	6. 最初と最後の頁 1, 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.18910/67901">https://doi.org/10.18910/67901</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西口光一	4. 巻 22
2. 論文標題 学習言語事項からの解放と自己表現活動への移行は何を意味するか 自己表現活動中心の基礎日本語教育とKrashenの入力仮説	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 多文化社会と留学生交流	6. 最初と最後の頁 67, 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.18910/67908">https://doi.org/10.18910/67908</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西口光一	4. 巻 24
2. 論文標題 世界内存在とことば 第二言語教育における実存論的転回に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多文化社会と留学生交流	6. 最初と最後の頁 9, 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 西口光一
2. 発表標題 日英語における発話構築の基底特性
3. 学会等名 第5回カーディフ大学応用言語学研究会（5th Cardiff Symposium of Applied Linguistics and Japanese Language Pedagogy）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西口光一
2. 発表標題 言語の学習とクリエイティビティ
3. 学会等名 言語文化教育研究学会第6回年次大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考